

平成27年度 岡山県・兵庫県渡来系関連資料調査報告

多田 麻希子・山田 兼一郎
奈良 竜一・鈴木 広樹

はじめに

古代東ユーラシア研究センターでは研究プロジェクト「古代東ユーラシア世界の人流と倭国・日本」の主たる研究対象の一つである「朝鮮半島からの渡来人と彼らが日本列島内に形成したコミュニティの研究」を推進するため、平成28年2月4日（木）～平成28年2月6日（土）に渡来者集団の居住地の一つである岡山県と兵庫県の資料調査を行った。

調査地である岡山市、総社市、姫路市一帯は、渡来系要素をもつ古墳、山城、集落跡などの遺跡群が点在している。また、古代末～中世に展開した備前国・播磨国の荘園遺跡の踏査から、半島文化を受容する際の移植・媒介者である渡来者・渡来者集団の＜流動と土着＞化の歴史的経緯の検討を行った。

以下より、今回の調査内容および成果を日程ごとに詳述する。今回の報告では紙幅の関係上、調査を実施した全ての遺跡、資料を紹介することはかなわなかった。あらかじめ、上記の点をご寛容いただきたい。

【参加者】※肩書は調査当時のもの

- | | |
|--------|--------------------------------|
| 今津 勝紀 | （岡山大学教授） |
| 亀田 修一 | （岡山理科大学教授） |
| 坂江 渉 | （兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研究室研究コーディネーター） |
| 古市 晃 | （神戸大学准教授） |
| 飯尾 秀幸 | （本学文学部教授・本センター代表） |
| 荒木 敏夫 | （本学文学部教授・本センター研究員） |
| 高久 健二 | （本学文学部教授・本センター研究員） |
| 湯浅 治久 | （本学文学部教授・本センター研究員） |
| 土生田 純之 | （本学文学部教授・本センター研究員） |
| 川上 隆志 | （本学文学部教授・本センター研究員） |

鈴木 広樹 (本学大学院文学研究科博士後期課程・本センターリサーチ・アシスタント)
多田 麻希子 (本学大学院文学研究科博士後期課程・本センターリサーチ・アシスタント)
奈良 竜一 (本学大学院文学研究科博士後期課程・本センターリサーチ・アシスタント)
山田 兼一郎 (本学大学院文学研究科博士後期課程・本センターリサーチ・アシスタント)

調査内容と成果

(1) 2月4日(1日目)

JR 岡山駅(13:00)→足守庄荘園関連遺跡(14:00～15:30)
→鬼ノ城跡(16:00～17:00)→総社市内ホテル(17:30)
→研究会(18:00～20:00)

・足守庄荘園関連遺跡

岡山県岡山市北区足守の地域一帯に比定されている足守庄荘園関連遺跡は、葦守八幡宮(写真1)を中心とする足守川流域に展開しており、その景観を記録した荘園絵図(図2)が現存している。『和名抄』には、備中国の郡名が九郡記されているが、その内の「賀陽郡足守〈安之毛利〉」の遺称地に存在する荘園である。

九世紀以降、一帯には賀陽氏が勢力を有しており、開発が進められていた。荘園化の正確な年代は不明だが、絵図(図2)の奥書署名によれば、立券荘号された嘉応元年(1169)に後白河院に寄進されたと推定されており、このとき荘園の範囲を明示する四至勝示が定められて絵図が作成された。絵図の裏判を案主賀陽氏、下司藤原氏が行っていることから寄進主体が賀陽一族と推定される。寄進後は、後白河院の家政機関によって支配管理され、預所が設置されていたが、元暦元年(1184)に安倍資良が私得分を神護寺に寄進したことを契機として、後白河院も年貢一円を同寺文覚に寄進することで、神護寺による管理が成立した経緯が「神護寺文書」に残る(僧文覚起請文『平安遺文』4892)。

絵図に描かれた荘園の景観は、中央を南北に貫く大井川(足守川)流域に条理で区画された水田が広がっており、中央には現・葦守八幡宮に比定される「八幡宮」の記載があり、現在でも道や寺社、ため池、条理、水田の痕跡などが極めて良好に保存されていた。

「足守庄」の荘号の初見は嘉応元年(1169)であるが、「アシモリ」の地名は古代の史料にも散見される。古いものでは、応神天皇の吉備行幸伝承のなかにその名がみえる(「葉田葦守宮」)。吉備地域の在地首長の本拠地の一つが「足守」であり、いわゆる「吉備の穴海」に存在したとされる「吉備津」と「足守」の地は足守川を経由して繋がっていたようで、古くから吉備地域の中心地であった。また、飛鳥寺から発見された木簡の記載から、7世紀の評制段階から「加夜評葦守里」が存在したようで、その歴史は長い。その他にも、平城宮木簡や『正倉院文書』にも賀夜郡や葦守郷の様相を伝える史料が残存しており、地域の古代史料は比較的豊富である。

『扶桑略記』寛平八年(896)九月二十二日条には『善家秘記』逸文が残っており、賀夜郡で「賃

殖」を蓄えた賀陽一族の姿を伝えている。当時、備中介であった「賀陽良藤」は本郷が「葦守」の地であり、兄・豊仲は賀夜郡大領を、弟・豊恒は吉備津神宮（吉備津神社か）の禰宜を務めており、備中国の地域支配の拠点である行政・祭祀の要職を一族が担っていた。賀陽氏は、在地だけでなく中央で活躍した者もいたようで、九世紀初頭の文人官僚である「賀陽豊年」はその代表例であろう。彼と「葦守」の関係を示す直接的な史料は残っていないが、本貫地を離れて都でその才能を発揮した賀陽一族として注目すべきである。



写真 1. 葦守八幡宮 石鳥居

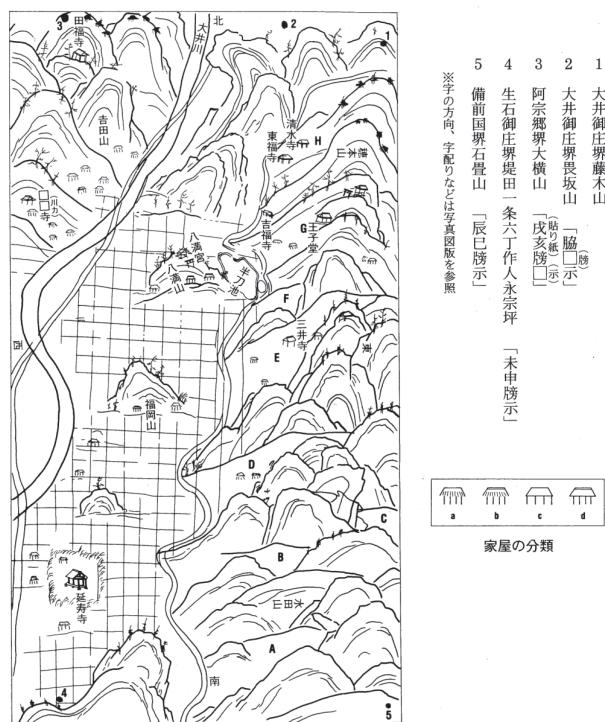


図 1. 足守庄荘園絵図トレース（鈴木 1994）から転載

吉備地域は五世紀代から朝鮮半島南部と独自の交流・交通関係を構築して、大陸・半島の先進文化を摂取してきたことが、考古学的に跡づけられつつある。賀陽氏はその氏名から朝鮮半島南部の伽耶地域との関係が想起されており、吉備地域の旧国造のうち、吉備一族を称する五国造として古くから備前・備中南部に本拠を構えていた。彼らは半島から渡ってきた渡来者・渡来者集団に出自をもつ氏族として、長い年月をかけて、日本の在地社会に土着化・定着化してゆきながら、平安時代には日本の律令官人として在地・中央で活躍した可能性がある。「足守庄」を管理した一族である賀陽氏の列島内での実態と変遷を検証することで、渡来者・渡来者集団の〈流動と土着〉化の歴史的経緯、とりわけ土着化して日本化してゆく人々の足跡を追うことが可能になるのではないか。

(山田兼一郎)



図 2. 備中国足守庄莊園絵図 (神護寺蔵)
(『中世莊園絵図大成』から転載)

・鬼ノ城

鬼ノ城は、岡山県総社市にある標高 397 メートルの鬼城山に築かれた古代山城である。

鬼ノ城は史料上の記載がないため、神籠石系山城と位置づけられているが、朝鮮式山城の特徴も多分に備えている。今回はその特徴を確認しつつ、亀田修一氏の案内のもと角楼・水門・建物跡などを中心に調査を行った。

まず、全長約 2.8 キロメートルにわたる城壁は、基本直線部は版築土塁で、要所は石垣で築かれており、基底部は約 8 メートル、高さ約 6 メートルとなっている。基底部には列石が置かれていたが、これは近年の研究により土留ではなく雨水による土塁基底部への浸食保護が目的で設置されたと考えられる。また、城壁の内外には、幅約 1.5 メートルの敷石が敷設されているのも鬼ノ城の特徴である。

城門は 4 つあり、花崗岩製の唐居敷をもつ堀立柱城門である。日本の古代山城において、石敷きの城門をもつ例は九州の神籠石系山城では発見されておらず、更に鬼ノ城の西・南・北門の石敷きがコの字形の門礎石となっていて、これと類似したものが、石城山城や讃岐城山城などの瀬戸内の神籠石系山城で確認されていることから、鬼ノ城と瀬戸内の神籠石山城との関連性が考えられる（向井 2017）。また、門の入り口は、懸門という段差を設けて敵の侵入を防いでいる構造となっている点や、北門には床面中央に排水用の石組み溝が作られるなど排水機能をもつ点など、朝鮮半島の山城との類似点も確認できる（亀田 2009）。

次に、城内の谷水を排出するための水門が 6 つあり、上部は版築土、下部は石で築かれている。水口が地面から 1.2 メートルも離れている点が興味深く、亀田氏は朝鮮半島においては、新羅地域の山城では水口が地面から離れているものが多数見受けられることを指摘している（亀田 2009）。

角楼は城壁から外側へ 4 メートル、幅 12 メートルの方形の突出部で、防御施設と考えられる。6 本の角柱とその間を石垣で、上部は版築土塁で作られている。柱が城壁の表面に埋め込まれた状態であることも鬼ノ城の特徴である。城内側には、角楼に上がる幅 11 メートルを超える階段も築かれている。

なお、神籠石系山城では見られないが、鬼ノ城では礎石建物が 7 棟確認されており、鬼ノ城の管理を行なうための施設、或いは食糧庫として使用されていた可能性がある。この他、貯水池や溜井、第 4 水門付近からは鍛冶工房跡や 12 基の炉跡、版築土塁のために使用されたと考えられる土取り跡、烽火場跡なども発見されている。

鬼ノ城の築城時期・目的・主体者などに不明な点が多いが、多数の出土遺物が発見されており、特に製作時期が 7 世紀末から 8 世紀初め頃とされる須恵器や土器が大量に見つかっている。これは従来、天智四年～天智六年（665～667）頃が築城時期と考えられてきたものが、須恵器の製作時期と多少ずれることになる（村上 2010）。今後の調査・研究の進展を待ちたい。

（多田麻希子）



写真 2. 鬼ノ城西門



写真 3. 南門調査風景

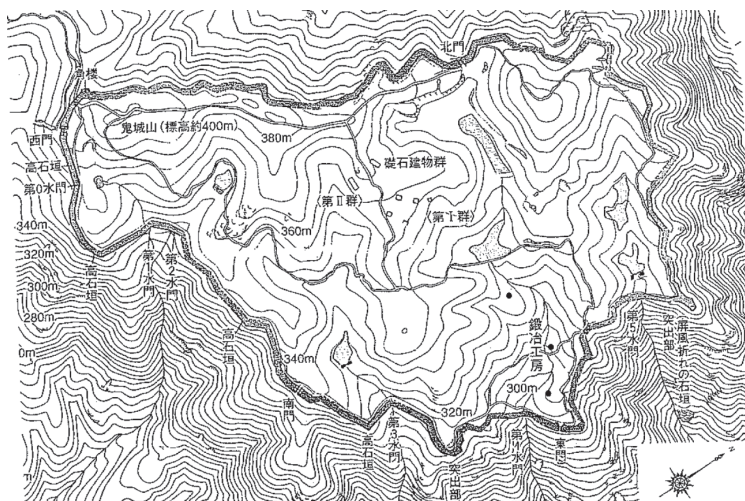


図 3. 鬼ノ城全体図 (S=1 / 10,000, 総社市 2005 より引用)

(2) 2月5日(2日目)

総社市内ホテル(8:30)→秦廃寺(8:45～9:00)→備中国分寺跡(9:00～9:45)
→造山・千足・榊山古墳(10:00～10:30)→楯築弥生墳丘墓(10:40～11:10)
→上東遺跡(11:30～11:40)→熊山遺跡(13:30～15:00)
→姫路市内ホテル(16:30)→研究会(17:00～19:00)

・造山古墳

造山古墳は岡山県岡山市に位置し、墳長約360メートル、高さ約32メートルをはかり、大仙古墳(伝仁徳天皇陵)、菅田御廟山古墳(伝応神天皇陵)、上石津ヶ丘古墳(伝履中天皇陵)に次ぐ全国でも第4位の規模を誇る巨大前方後円墳である。築造時期は5世紀前半と考えられている。墳丘は3段築成であるが、前方部が破壊され、その場所に荒神社が立てられている(写真4)。また後円部も中世に城砦として使用され、さらに、豊臣秀吉による毛利攻めの際に陣地になるなどして、大きな掘削を受けている。

出土遺物は円筒埴輪などが知られているが、内部についての本格的な発掘調査が行われていないため、その詳細は不明である。しかし、上述した荒神社の鐘突堂の脇には阿蘇凝灰岩製の刳抜式の長持型石棺の身部分が置かれ(写真5・6)、また当古墳の陪塚と考えられる榊山古墳や千足古墳からは朝鮮半島系遺物も出土しており、当時被葬者が吉備地域の首長としての広い交流関係を物語っている。

さらに近年の調査では周濠の存在が推測されており(新納2012)、不明瞭な箇所も多いものの徐々にその内容が明らかになりつつある。

・榊山古墳

榊山古墳は岡山県岡山市の造山古墳の南に連なる低丘陵上に位置し(写真7)、陪塚の一つと考えられている径約35メートルの円墳(造出し付き径約40メートルの円墳の可能性もある)である。1912年に地元の人々による開墾中に遺物が発見された。築造時期は5世紀前半と考えられている。

出土遺物としてはコウヤマキ製の割竹形木棺片をはじめとして、変形三角縁神獣鏡、馬形帯鉤、管玉・勾玉、鉄矛などがあり、その後に墳丘の南西側から高坏、壺、甕などの伽耶系の陶質土器(図4)が発見されている(亀田1997、2004、西川1986)。この中でも特に馬形帯鉤は、出土地が明確なものとしては長野市浅川端遺跡と当古墳の2遺跡のみであるため注目される。これら馬形帯鉤は朝鮮半島の永川漁隠洞遺跡や金海良洞里遺跡、天安清堂洞遺跡、清原松岱里古墳群など中西部～南部にかけて出土しており、近年の研究では分類や年代に関する研究(風間2006)も盛んに行われ、榊山古墳の被葬者、または造山古墳の被葬者が朝鮮半島との交流に関係していた遺物としてとらえることができよう(土生田2006)。

・熊山遺跡

熊山遺跡は岡山県赤磐市（旧熊山町）の標高 508 メートルの熊山山頂付近に位置する方形の石積遺構であり、国の指定史跡になっている。1973 年に石積復旧修理を前提にした発掘調査が行われた。周辺の丘陵上にも類似した数多くの石積遺構が存在するが、その中でも特に山頂付近の遺構が最も大きく、形も整っている（写真 8）。基底部と三段の基壇で構成されており、二段目には龕を設け、仏像などを納めていたものと推測されている。規模は基底部が一辺約 11.7 メートルであり、その上に約 7.7 メートルの一段目、約 5.2 メートルの二段目、約 3.5 メートルの三段目が築造されている。高さは一段目が約 1 メートル、二段目が約 1.2 メートル、三段目が約 1.2 メートルであり、全体高は約 3.5 メートルをはかる（熊山町文化協会 1974）。

出土遺物は発掘調査時に須恵器、土師器、瓦などが出土しており（図 5）、さらに三段目基壇の頂上部からは三彩釉小壺を納めた陶製筒形容器が出土したと伝えられている（写真 9）。築造時期は奈良時代と考えられており、仏塔としての性格が強いものと考えられている（近江 1973）。また、当遺跡の位置する熊山は山全体が古代から信仰の対象ともなっており、古代の精神性を考える上でも重要な意味合いを持っている遺跡と言えよう。

なお、このような性格の石積遺構は日本列島のみならず、韓国慶尚南道山淸郡に位置する伝仇衡王陵など朝鮮半島にもみられ、信仰を通じた文化的交流を垣間見ることができる。

（鈴木広樹）



写真 4. 造山古墳
後円部から前方部を望む



写真 5. 阿蘇凝灰岩製刳拔式長持型石棺



写真 6. 阿蘇凝灰岩片と石棺接写



写真 7. 榊山古墳全景

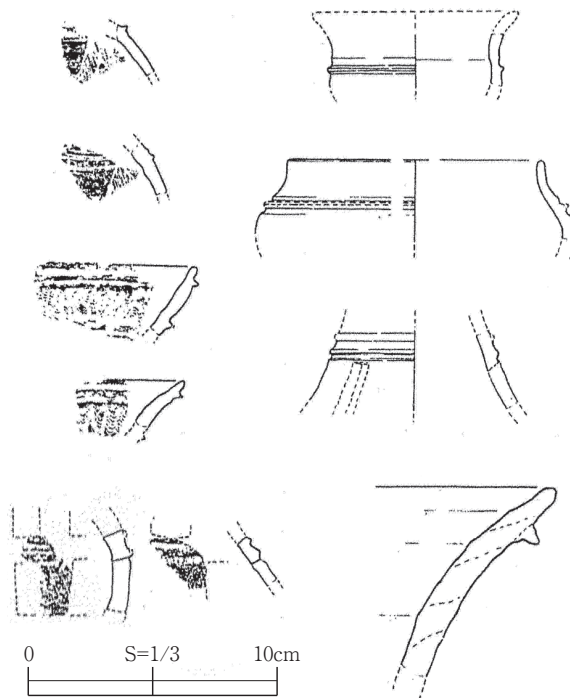


図 4. 榊山古墳出土陶質土器
(西川 1986 より)



写真 8. 熊山遺跡石積遺構

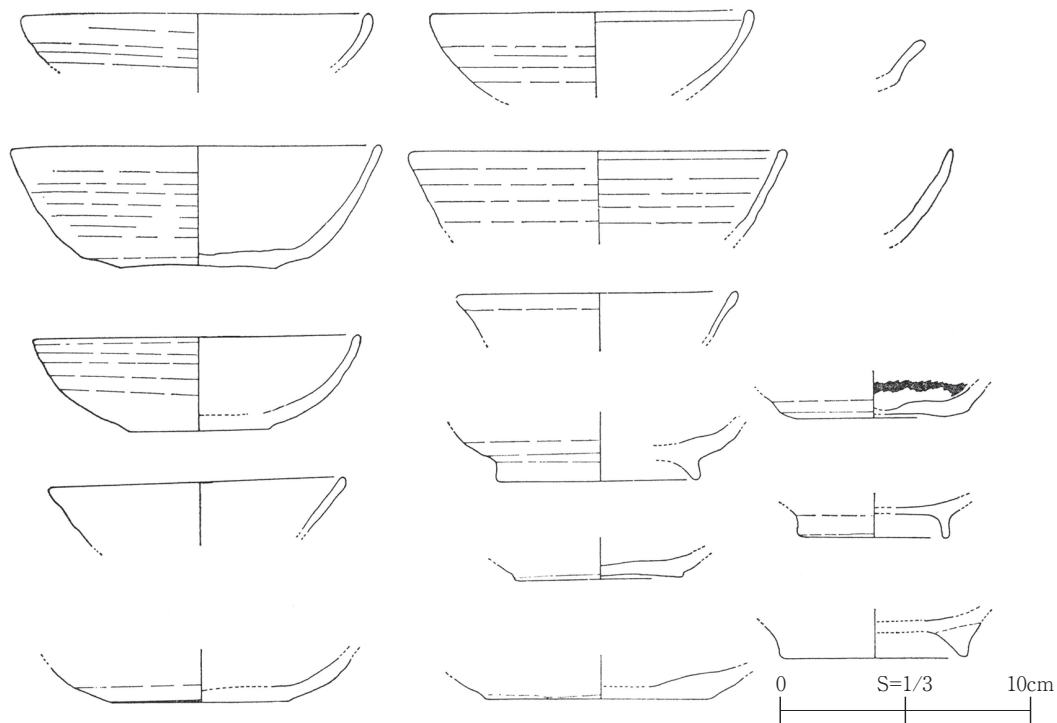


図 5. 熊山遺跡出土土器
(熊山町文化協会 1974 より)

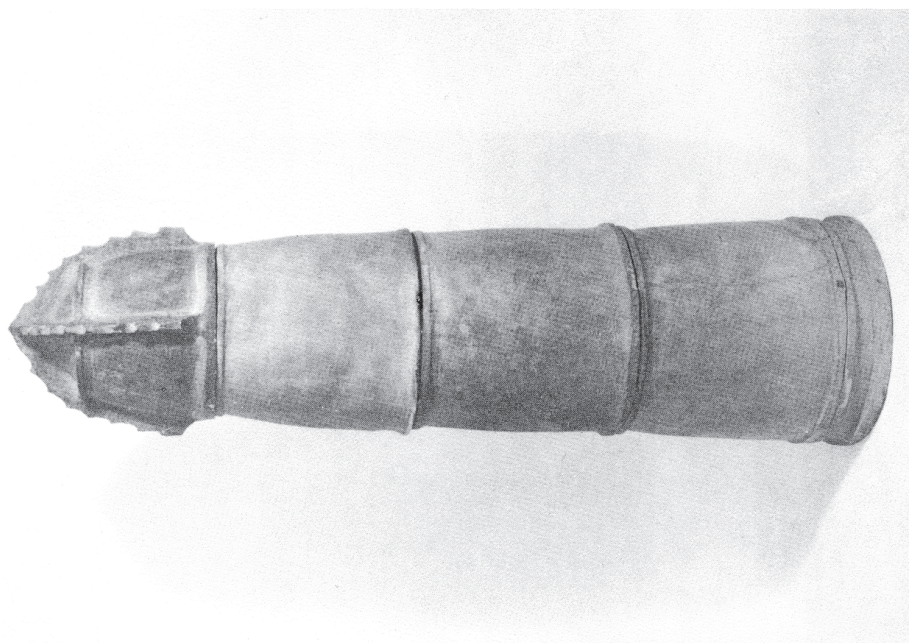


写真 9. 熊山遺跡出土陶製筒形容器
(熊山町文化協会 1974 より)

(3) 2月6日(3日目)

姫路市内ホテル(8:30)→伊和神社(10:00～10:45)
→一つ山古墳(10:50～11:00)→斑鳩寺・法隆寺領播磨国鵜莊(13:00～14:30)
→JR姫路駅(15:00)

・伊和神社

現在、兵庫県宍粟市一宮町須行名に位置する伊和神社は、大己貴神を主祭神とし、少彦名神・下照姫神を配祀する。

本調査では、主に古代の伊和神社について調査をした。中世以降の伊和神社についての沿革は【伊和神社関連年表】を参照。

この地域(播磨国)一帯の神社についての記述は『延喜式』にみえる。『延喜式』巻9・10に、各国の郡別に式内社が列挙され、播磨国の式内社については巻10に記載されている。そこには、47社、50座の社の名前がある。それぞれの社の官社化の時期については不明である(揖保郡家嶋神社、赤穂郡八保神社については時期の記載がみえる)。坂江編2007によれば、これらの神社の多くは、各土地の有力氏族が祀る氏神、あるいは朝廷から「神威」などを期待されたものだったとされる。

本調査で実見した伊和神社について『延喜式』巻10・神名下には

伊和坐大名持御魂神社〈名神大〉

【伊和に坐す大名持御魂神社 〈名神大〉】

とあり、宍粟郡の伊和坐大名持御魂神社が現在の伊和神社にあたる。また、伊和坐大名持御魂神社は「明神大社」として位置付けられている(坂江編2007)。

ところで、『播磨国風土記』には、伊和神社に祀られている伊和大神に関する記述が非常に多い。

村上1996は、伊和大神に象徴される勢力を「伊和族」と称せられている氏族として想定し、その本拠地は、当初は揖保川・千種川上流・西播磨の宍粟・佐用周辺だったとし、後に宍粟・讃容郡を拠点としていたと推測する。ここからさらに、南方まで進出するも(姫路の手柄山あたり)、ヤマト政権による全国統一に直面し、元の本拠地である宍粟・讃容郡に押し戻されたと考えられている。

坂江編2007は、伊和大神を「西播磨を中心に信仰されていた」と推測し、他所からやってきた神と国占め争いや国土巡行を行ったと指摘する。伊和大神が行ったこれらの行為は、国土統治のための呪術的・視覚的確認行為であり、播磨地域の支配者が神格化されたものとみている。

また、『古事記』・『日本書紀』に、伊和大神を確認することはできないが、『播磨国風土記』では、伊和大神と葦原志許乎命とを別名同神として交互に登場させていることが指摘される(坂江編2007)。

伊和大神をめぐるこれらの研究の共通点は、地域の支配層であること、それが神格化して伝わってきたことであろう。さらに、『播磨国風土記』中の「地域の神」としての伊和大神「神話」は、出雲や但馬との交通や近畿地方との交流を経て展開されたものであり、このような「神話」は、「国譲り神話の型」のひとつであると推定することができる（坂江編 2007）。

このことから、ヤマト政権を中心とする日本古代の歴史とは異なり、播磨を中心とした地域には、この地域固有の古代の「中心」と「周辺」・「周縁」の権力構造が存在し、それらの関係から文化が成熟していく様子もみえてくるのではないだろうか。

【伊和神社関連年表】

元号	西暦	内容
太古	－	大己貴神は少彦名神とともに天神の命を蒙り、天下を経営し、最後に播磨国を経営しようとし、大業を終える。「おわ」と言う。
天平宝字 2 年 8 月 3 日	758	伊和恒雄神領を寄進。
大同元年	806	神封 13 戸を給せらる。
貞観元年正月 27 日	859	従五位下勲八等より従四位下に昇る。
元慶 5 年 6 月 29 日	882	正四位下に進む。 延喜の制名神大社に列す。 國の一宮と称す。
天慶 3 年	941	平将門征討の御願報賽として神封 5 戸を加増し、天下諸神同時進階に位階を進める。
正暦 2 年	991	正一位に叙せられる。
永久 3 年	1116	巨郷務源朝俊より真光寺敷地を寄進せり。
平治元年 8 月 2 日	1159	社殿焼失。再建する。
永萬元年	1165	紙 200 帖を神祇官に進貢する。
文治 2 年	1186	白河法皇、院宣を下して、国司の留守所に講田の惣検校を停め、郷々散在の講衆住房の在家捍仕を禁止される。
建長元年 4 月	1249	再び炎上する。神殿を再興する。
文永 10 年	1273	贊河である掛保川の水を穢したことによって、野口保の庄役と紛争。
※以降、南北朝時代にかけて社領は次第に増え、所謂染河村内村の修理田は、同村の領家書写山圓教寺の庇護をうける。百姓の社役を全うする。		
元享年間	1321 ～ 1324	社殿焼失し、伊和 3 社のうち、己勝社は追年造営するが、修理米不足で功を遂げず。
嘉暦年間～建武 2 年	1326 ～ 1335	国司新田義貞は、雑事米を積む。早期再興を望む。

延元元年 4 月	1336	新田義貞白旗城が賊軍に囲まる。賊軍追討祈願のため、神田甲冑を寄進。 城の囲から解放されるも、賊は東に逃亡。火を放つ。社殿焼亡。これ以降、社頭は荒廃する。
嘉吉元年	1441	嘉吉の変。赤松満祐没落。～応仁元年（1467）まで伊和神社は廃頽の時代。しかし、かなりの社領収入あったと推察される。
延徳 3 年 7 月	1491	当国守護職赤松義則が本社以下末社まで造営を加え、美作國粟井庄を寄進。 その子満祐は義則の意思を継承し、当社を保護・崇拝し、未曾有の隆昌をもたらす。 惣神殿を創立する。 総社と称す。
永禄 5 年	1562	宇野村頼、社殿を再興する。以降、村頼、政頼、祐清の 3 代は、長水城の城内鎮護の神とし崇める。
天正年間	1573 ～ 1576	豊臣秀吉、長水城を陥落させる。社領を没収。
慶長年間	1596 ～ 1614	池田輝政、黒印領を寄せる。 池田恒元、社領 127 石を進納。
寛文 6 年	1667	恒元より黒印領 130 石を捧げ、領主將軍の崇敬をうける。
明和・天明頃		境内樹木の紛争について氏子との出入あり。
嘉永 5 年 2 月	1852	社殿炎上。
安政 5 年 2 月	1858	幣殿以下の建物は播磨国内住民の浄財で再建。
文久 2 年 4 月	1862	領主小笠原貞孚が再建する。
明治 6 年 11 月	1873	縣社に列す。
明治 18 年 4 月	1885	國幣小社となる。
明治 45 年 6 月	1911	國幣中社昇格。

兵庫県神職会編『兵庫縣神社誌 中巻』（臨川書店、1984 年、復刻版）をもとに作成



写真 10. 伊和神社本殿



写真 11. 鶴石



写真 12. 一つ山古墳

伊和神社の南方約 400 メートル位置する、5 世紀中ごろと思われる古墳である。長径 22 メートル、短径 18 メートル、高さ 3 メートル。墳丘の周囲は耕作により、完形を失っている。封土上には、径 10 センチくらいの川原石が葺石として用いられる。本古墳の西側からは銅鐸の出土、北方には名畑弥生遺跡、東方に横穴式石室を主体とする群集墳が分布している。

(奈良竜一)

・斑鳩寺 播磨国鵜荘

兵庫県揖保郡太子町付近を中心とする地域一帯に比定されている播磨国鵜荘は、同じく太子町に存在する斑鳩寺（写真 16・17）と密接な関係にあり、嘉暦四年（1329）と至徳三年（1386）の年紀をもつ荘園絵図が現存する（図 6～10）。

荘号、寺名からも推測されるように、奈良県生駒郡斑鳩町の法隆寺（斑鳩寺）やその創建に関与した聖徳太子との関係が深い荘園とされている。法隆寺伽藍縁起并流記資財帳によれば、推古天皇から聖徳太子に法資として与えられた所領であり、後に法隆寺に施入されて鵜荘となった。荘域は奈良時代に開田作業が推進され、平安時代にもわずかながら拡大された記録が残っている。13 世紀後半には衰退が始まり、一時は鎌倉幕府に没収されていたが、法隆寺側の猛烈な抗議により返還された。前述の嘉暦図は返還に当たって作成されたものと推測されている。

荘域には現在も歴史的景観や遺跡が保存されており、その中でも「太子の投げ石」と伝えられる石は昭和四六年（1971）に「鵜荘勝示石」として兵庫県から史跡指定されている（谷岡 1976）。平成七年（1995）には、「鵜荘勝示石」の一つである「平方勝示石」の町道整備事業に伴う移設問題が発生しており、日本史研究会を中心とした保存運動が展開された（春田 1996）。結果的には、兵庫県教育委員会が提示した方針に伴い、建設した道路の中央分離帯の一区画に勝示石を保存する方法がとられたようで、踏査時にその保存状態が確認できた（写真 13・14）。



写真 13. 平方勝示石①

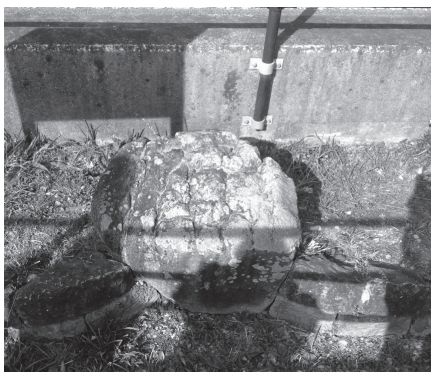


写真 14. 平方勝示石②

その他にも、「鵜北山根の投げ石」の観察もすることができた（写真 15）。

『播磨国風土記』をみると、その地名伝承や土地開発伝承に多くの渡来人が散見される。特に注目すべきは、播磨地域における仏教活動の隆盛に関わった高句麗僧恵便の存在である。敏達天皇一三（584）年（または癸卯年＝敏達天皇一二年）に蘇我馬子の命により修行者の探索が行われて発見されたのが播磨の還俗僧の高麗恵便であった。蘇我氏は仏教受容期に積極的に仏教興隆を推進し

た氏族で、この時に馬子は恵便を師僧として、共に仏教の受容に深く関与した司馬達等の女3人（善信尼・禅蔵尼・恵善尼）を出家させたことは、日本最初の出家者として有名である。

鵜荘との関連からみると、荘域は古代の行政区分では「揖保郡」に該当する地域であり、この地域は飾磨郡と並び風土記に渡来人・渡来系氏族の伝承が多く残っている。風土記の伝承は精査する必要はあるが、郡内の地域開発が渡来者・渡来者集団によって担われていたのであれば、聖徳太子が保有した播磨地域の領有地と渡来人との関係も荒唐無稽なものではないだろう。桑原村主氏は『新撰姓氏録』に渡来系氏族として記録されており、同じく「桑原」の名をもつ諸氏族と出自や姓に異同があるものの同族と認識されていた。彼らはいわゆる「今来漢人」として畿内を中心に安置されたが、次第に地方へ移動して定着してゆく。播磨地域における「桑原氏」の活動は12世紀の史料からも確認されており（岩本1996）、渡来人・渡来系氏族が播磨地域に流動して定着・土着化してゆく一端がみてとれる。今回は調査結果をもとに憶測を踏まえながらも、本研究センターの問題関心を中心に鵜荘と播磨地域の渡来者・渡来者集団についての概観を試みた。

（山田兼一郎）



写真 15. 鵜北山根の投げ石